

## 「問題」と「課題」の相違・相関

従来から、「問題」と「課題」という言葉はニュアンスがよく似ているために、その使い分けが不明確な場合が多いので、少し明らかにしておくことにしよう。

結論；「問題は解決するもの」であり「課題は実現するもの」である。

ある本には「問題と課題の違いがはっきりしていないのが問題である。」などと揶揄的に表現されているが、決してそうではない。「問題」と「課題」には明らかに相違があり、相関があるのである。以下の論述の展開でその相違と相関を読みとってもらいたい。

- ① 「課題」がはっきりして初めて、それを実現するための「問題」がでてくる。  
すなわち、実現しようとする「課題」がなければ「問題」は発生しないのである。
- ② 関係者の間で、何をしようということや、実現すべき課題内容が暗黙の内に了解されているときは、いきなり問題の解決からアプローチすることができる。
- ③ しかし、関係者の間で、何をしようとしているのかの目的と手段の関係の認識に差がある場合は、「問題」の把握の内容が異なってくる。いわゆる問題認識の差が存在する。
- ④ したがって「課題」に対しては共通認識を確実に持ち、その実現のために生ずるであろう「問題」の解決も共通の認識で立ち向かうことが肝要となる。
- ⑤ しかれば、「問題」を「目標を実現するための必要条件」という言葉に置き換えることで「問題」という言葉は不要となる。いわゆる「無問題」状態で物事を進めることが出来るのである。

次に「問題」という言葉が普通に使われている場面を紹介する。

従来、数学の世界には「問題」という言葉が使われる

数学は大きく捉えれば、数式で自然の法則の関係をスマートに表現することができる、いわば表現の学問である。したがって「すでに存在する自然の法則の関係を、数式という表現方法で表現しさえすればよい」という暗黙の「課題」があると理解されているので、「課題」の確認をするまでもなく「問題の解決」もしくは「問題を解く」という表現で十分なのである。

自然科学の世界で「問題の解決ないしは解明しないと、その目的とする自然の原理・メカニズムが解明できない」というような表現があるが、ここでも「自然のメカニズムを解明するという課題」がすでに存在し、おおかた了承されていると考えれば、「問題の解決」という表現も妥当である。しかし、「課題を実現するための必要条件を実現すること」という表現に置き換えても矛盾はない。

別の例で更に考察してみよう。

良い製品が出来るはずで、かつ試作行程では希望通りのものが出来た工程で量産されたが、そこで不良品発生という問題が生起したとしよう。

ということは、この不良品はすでに人がねらった「自然のメカニズムを上手く組み合わせ

せて、その目的のものを作れるという因果関係の組み合わせの工程」なかで出来た不良品ということになる。

であれば、明らかに、なんらかの、もともとねらった工程の中にある因果関係にあてはまらない因果関係から発生したかもしれない。あるいは、ねらった因果関係に基づく工程が良くなかったのかもしれない。

したがってその原因を明らかにして、問題解決しようとしているのは、あきらかに「当初ねらった希望の結果を得る」という「課題」のもとに、それを実現するための必要条件を探して、「問題」を解決しようとしているのであって、わざわざ「課題」までさかのぼらなくても「問題」という表現のままであつかえるのである。

というような回りくどい表現に固執したのは、日頃一般的に使われている、あるいは直面する「問題」を容易に解決するためには、まず「課題」を認識して、それからその「課題」を「実現」するための一条件として取り扱おうと、従来よりも容易に「解決」の方向へ向かい易い、ということである。

ようするに「何をしようとしているのか？」を常に自覚して「そのためにはどうすればよいのか？」を冷静に分析して立ち向かえば自ずと、「問題解決」「課題実現」がえられるという極意を会得してもらいたためである。

以 上